

菅江真澄研究

第 54 号

平成 16 年 12 月 31 日

発行 菅江真澄研究会

秋田市寺内兎桜一丁目 5-55

古四王神社社務所内

電話 018-845-0333

<http://w2.amn.ne.jp/~sugae/masumi.html>

E-mail:sm4719@mx2.harmonix.ne.jp

振替口座 秋田 02520-6-5018

目次

真澄が記した河辺郡 大場与志美……	1
新入会員の報告……	8
図書紹介	
『安水稔和 詩集 蟹場にて』 安水稔和著……	9
『かなせのさと』第一集 菅江真澄資料センター編……	10
『菅江真澄と秋田』 伊藤孝博著……	10
『真澄学』 真澄学編集委員会編……	11
寄付金のお礼……	12
真澄往来……	12
おらほの真澄……	13
原稿募集のお知らせ……	16
刊後録……	16

真澄が記した河辺郡

『月の出羽路河辺郡』『勝地臨毫河辺郡』を中心に

大場 与志美

はじめに

菅江真澄は今からちょうど二二〇年前の天明四年（一七八四）九月末、三崎峠（象潟町）を経て初めて秋田に入った。三十一歳の壮年であった。天明の飢饉が深刻化していた時である。その後、矢島・湯沢から久保田を経て

津軽、南部、伊達領などを通り、天明八年、北上して松前に渡って四年間滞在したあと、天明四年から十七年後の享和元年（一八〇一）十一月に岩館から再び秋田に入った。そして文政十二年（一八二九）七月、仙北郡で七十六歳で亡くなるのである。当時としてはかなり長命であったといえる。

当時の秋田藩は出羽六郡、すなわち秋田、山本、河辺、仙北、平鹿、雄勝郡からなっていた。河辺郡は中世には豊島氏が今の戸島

再び秋田に来てから実に二十八年の長い間、県内各地を歩き、多くの、日記、地誌、随筆、図絵集などを私たちに残してくれたのである。その内容は民俗、歴史、地理、国学、詩歌、考古、本草、宗教など広い分野に及ぶ貴重なものである。

久保田に住んでいた真澄は河辺郡の村々を何度か訪れている。当時太平川を渡れば河辺郡であり比較的近い地域でもあった。

河辺郡の昔と今

に豊島城を築きこの地方を領していたことから、豊島郡とも言われていた。現在の河辺郡は河辺町と雄和町の二町のみであるが、真澄が記録した当時の河辺郡はおよそ次のようにかなり広い地域となっていた。

現在の河辺町の全部、今の雄和町のうち女米木、左手子の辺りまで、協和町の一部船岡の辺りまで、それに今では秋田市となっている新屋、浜田、石田坂、豊岩の辺りまでと、秋田市の東部の上北手、下北手、それに桜、横森、牛島など、太平川を境としてその外側の地域となっていた。寛文四年に豊島郡から河辺郡となったが、その時点で全部で五十九カ村となっている。明治に入つての大合併、その後大正・昭和の分離合併などで現在の形となったものである。

平成十七年一月には河辺、雄和両町の秋田市への合併が決まっております、その後は河辺郡そのものがなくなってしまうことになる。

次に真澄が記した河辺郡について見てみたい。

真澄の河辺郡についての記録

河辺郡に関して、真澄が記録したものとしましては、現在次のものが残されている。『勝地臨毫河辺郡』『月の出羽路河辺郡』『筆の山口』

『槻の若葉』、ほかに『勝手の雄弓』の中に書かれている図絵などである。

◇『勝地臨毫河辺郡』は文化十年（一八一三）に作成されたもので、地誌を作成しようとした時の写生図と見られる。余白に説明文がある。全九丁、絵は八枚と少ない。大型本で表紙に河辺郡の十七カ所の地名を記している。

◇『月の出羽路河辺郡』文化九年〜十年の頃に書いた地誌草稿とみられる。正式な名称は『月のい伝波路 上の巻 河辺ノ郡 一事』となっている。上の巻とはなっているが、下の巻は未発見である。下の巻も書く予定であったのかも知れない。大形本で全二六丁、清書まではゆかず、未完成本となっている。

この地誌には、地区の項目が二十五カ所と神社四カ所の記述がある。雄和町についての記述は少なく、真澄は雄和町へ入ったことがなかったかとも思われる。

◇『筆の山口』文政五年（一八二二）の日記で、三月上北手大戸の松淵家に行き、上北手を探訪した時の日記である。この中には上北手の大戸より見た鳥海山の絵など図絵三枚（説明文あり）がある。

◇『槻の若葉』『筆の山口』に続く日記であるが僅か半日の記録である。『筆のしがらみ』の中に入っている。

◇『勝手の雄弓』の中の図絵十六枚

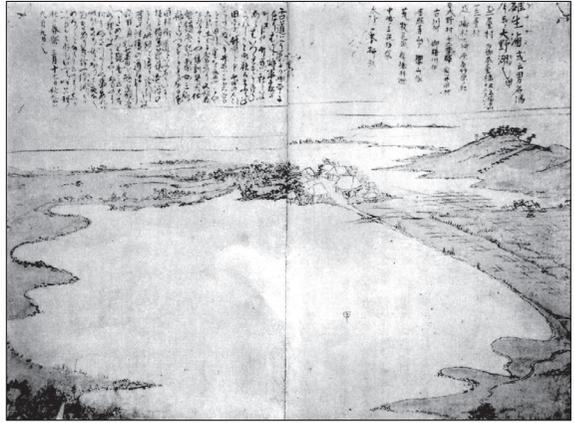
文化八年（一八一二）八月、那珂通博（藩校明徳館助教）らと、勝手明神（秋田市太平黒沢）に詣でたあと、岩見三内（河辺町）の奥地まで行った時の日記の中に描かれた図絵三十四枚の中の十六枚の図（説明文あり）で、河辺郡のものとしては、岩見三内地区の筑紫森、鶴養、殿淵などを描いている。なお、この日記は残念ながら勝手明神から先の文章は現存しないが、残された図絵により当時を偲ぶことができる。

次に、真澄が記した河辺郡の村々などを図絵と地誌を中心に見てみたい。

一、大野の湖ほか

今の秋田市大野のあたりから眺めた風景を描いたもので、その上部余白のところにかなり長い説明文を書いている。それには、

「雄生^{オナガタ}満^{ミツ} 或言^{アコト}名^ナ瀧^{タギ}今言^{イマコト}大野ノ湖也。二^ニ屋^ヤ村、お茶屋橋 又言^{マコト}猿田川サルタバシ 三屋^{ミヤ}村、戸嶋村、柳原、竹原ノ社、大野村、仁井田駅、仁井田村、古川、御膳川、金照寺山、桜山、荒牧邑、福嶋村、中嶋ノ三狐坊、大野ノ一本柳。古道は今道より西二丁に在り、むかしは將軍家の□□竹原ノ社といふあらむ、いつれぞと尋ね



大野の湖《勝地臨毫河辺郡》

られしかと御社はさふらはねと、田ノ字に竹原と申処の人とこたへぬ。今竹原三光ノ宮とて、日月星を斎ふにや、六月十一日に祭りあり。又稲荷を祭るにや、倭訓栞二言ク、伊勢鎮座記に専女三狐ノ神といへるによれるなるべし。田村街道といふあり、いにし坂上將軍逆徒退治のとき、此道を通り給ひしといふ。昔の往復の道なるよし。秋田巡礼七番を糸曳観音、まためなり観音と云、これは妙理といふことにやとおもふに、村にふさはしからぬ事あれば、此ぼさつ女となりて夜な夜な哭きありき給ふ、俗語にめろめるとなくを言ふよ

りしかいへりとなむいへり。呂理ノ社の春祭は三月十七日、秋祭は九月九日也」

とあり、広々とした大野の湖とその手前の大野村、北の方に仁井田村、二屋村、猿田川にかかるお茶屋橋、そして金照寺山、桜の方までいいいに描いている。当時は二ツ屋あたりまで男女潟と呼ばれていた大きい湖沼があつたことが分かる。現在も田畑は少し残ってはいるが、住宅地として発展してきており昔の面影はない。

このあたりを書いた『月の出羽路河辺郡』（以下地誌とする）を見てみよう。

「……みなおや村にひとしく稲田佃り、瓜、茄子、菘(大根)、牛蒡などはたつものを、女はおひて久保田の市にそうるめる。広幡ノ社あり。右につちのと曰まちの石ぶみ、左にかのえさるつかの石をたてり。楓のわか葉の茂りたつ中に。朱の鳥居いちじるし。九月十九日の祭には、たなつものはたつものも、とりとりにささげ奉るとなん。……行くて小さき神のほぐらあり。何神ととへば、あないさんこぼうといらふ。いかなる神にやとおもへば、古狐の名なりとなむ。竹原の三狐ノ社をうつせるにや。稲荷大明神の札させり。……あまそぎめける高きしに居て、むかうきしべを見れば、ところ／＼にちりのこる花の、

若葉の中にあらはれて、石名坂(秋田市豊岩)のここの家ども、見えみ見えずみ、舟さしくだるに、また、わたし守の行かふるなど、見どころあるところ也。」

と記し、仁井田と同じく大野でとれた野菜を女の人が背負つて久保田の市に売りに出たこと、また広幡の社(現在の八幡神社)や、竹原の社(今の三皇熊野神社奥殿)なども記している。八幡神社の境内には今も巳待の石碑、庚申塔などが現存している。つちのと曰まちは巳待ともいわれ、己巳日の巳の刻をまつて弁財天を祈念すると福運が授かる信じられていた。己巳の日は弁財天の縁日で隔月にやってくる。八幡神社の石碑は境内に入って右側奥に現存、一辺ほどの四角い石塔で巳待ち供養塔安永五年(一七七六)十月と年号が彫つてある。かのえさるつかとは庚申塔のことと神社の前の小さいお堂の中に現存している。所謂、三猿二鶏が彫られ、享保十八年(一七三三)の年号があつたようであるが、今は三つの猿の図がやとわかる程度に風化が進んでいる。三皇熊野神社は今から一二〇〇年ほど前の桓武天皇の御代に創建されたといわれ、坂上田村麻呂が蝦夷征伐の途中戦勝祈願したと伝えられている。昔から牛島の鎮守として地元の崇敬を集めている。な

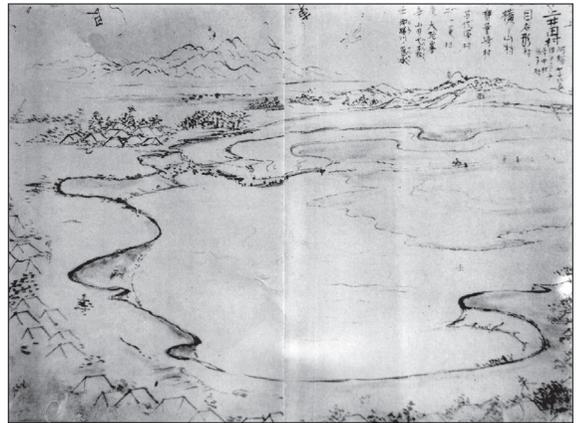
お、神社の横にはお稲荷さまも祭られている。
 なお、この図絵の説明文にはめりり観音についても書いている。この観音様はもと三皇熊野神社にあったが、明治の始めころ、神仏分離令により、牛島の宝袋院（曹洞宗）に移され、今も安置されている。

猿田川にかかるお茶屋橋は当時、大野の方から見ると途中遮るものもなく、湖の向こうにはつきり見えたようである。羽州街道が牛島を通っていて、参勤交代などの際、この橋のたもとの茶屋で休憩し、見送りの人達に別れを惜しんだと言われている。

大野を含む仁井田は藩政時代から野菜の産地として知られ、今も秋田市市場周辺で野菜を商う女性は仁井田の人が多い。仁井田は秋田長大根、河辺長大根の産地として知られ、大根の稲架掛は白いカーテンと呼ばれ、晩秋の風物詩である。

二、二井田村（仁井田村）ほか

絵の上部余白の説明文では「二井田村、駅ヤチ比良、ヨコマチ、中村、下村、目名形村、横山村、宝量崎村、苗代沢村、二ツ屋村、大蛇峰、山田ノ戈森、御膳川ノ旧水」となっていて、二井田村とそこから見た大きい川（雄物川）遠くの集落など広角的に描いている。



二井田村《勝地臨毫河辺郡》

地誌では、横町の大日如来堂、十王堂、そして空心庵（中村）の由来を書き、続いて「……古河は、寛永（一六二四〜四四）梅津半右衛門の功なり。河曲の村々、花のいとおもしろく咲きたるに、雨ふりきぬれば、春雨のふる河のべの山桜ぬるもいとほし花のしたみち」

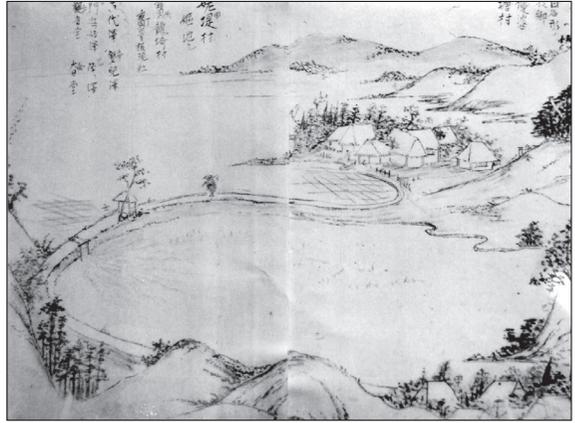
と詠んでいる。もと仁井田地区は一面の沼地や湿地帯であったが、秋田藩家老梅津半右衛門憲忠が新田開発を計画して着工、その子孫も引き継ぎ、着工より四代、約八十年の歳月をかけて元禄八年（一六九五）に完成したと

いわれ、このため仁井田地区には萬雄寺（曹洞宗・梅津家建立・現在金照寺山下）の檀家が多いといわれる。また、元禄九年に梅津家
 家臣による農民の撫で切り事件があり、今の仁井田切上の地名になったといわれている。
 この事件のことについて、真澄は何も書いてはいない。真澄の久保田滞在は梅津家の庇護の下にあった。書くわけにいかなかったと思われる。

三、堰池 など

左上の説明文では「目名形ノ枝郷優婆塘村。堰堤村、堰池、宝竜崎村、宝量権現ノ社、苗代沢、雙児沢、門兵衛沢、降り沢、観音堂、大日堂」となっている。手前に堰堤と大きい堰池、その先に田畑と宝竜崎村、遠く山裾に集落、そして池のほとりの道を鋤のようなものをかついで農夫まで描いている。

地誌では、堰堤村は当時家が七軒あったこと、宝量崎村については家が全部で五軒あったことなどを記している。当時の堰池は今の宝竜崎下溜池となっていて、ゴルフ場がそばにある。真澄が「中に胡瓜、糸瓜のさました石像が二つ立っている」と書いた宝竜権現は宝竜神社として集落のほずれに現存している。今、池のほとりに立って見ると向こうに



廻池《勝地臨毫河辺郡》

大きな日赤病院が見える。

四、桜村の萬雄寺 ほか

この絵の余白に長い説明文を書いている。「桜村に建る桜田山萬雄寺は梅津家の菩提寺なり。……山の峽に瑠璃光の森とて、薬師仏を祭る、是なん桜村の姓神とよぶ……」とあり、以下省略した。

地誌では萬雄寺の由来を

「……憲忠やや年老て、寛永七年庚午ノ七月十一日に卒れり。かくて闍信寺に葬む。法名



桜村の萬雄寺《勝地臨毫河辺郡》

図絵には小高い山の裾に萬雄寺とその境内を描き、すぐ前から大きい池、寺への松並木を、そして左端に、瑠璃光の森の薬師様と鳥居なども描いている。今訪ねてみると池はなく、そのあたりはアパートなど住宅地になっており、その先の小高い所に宗入寺（真宗大

を萬雄英傑居士と言ふ。憲忠ノ子半右衛門忠國、父のために知行所の桜村に仏刹を建て、桜田山萬雄寺といふ。寛永八年辛未七月に寺成就て、憲忠の亡骸を闍信寺よりふたたび桜村の寺にうつしをさめぬ……」と書いている。

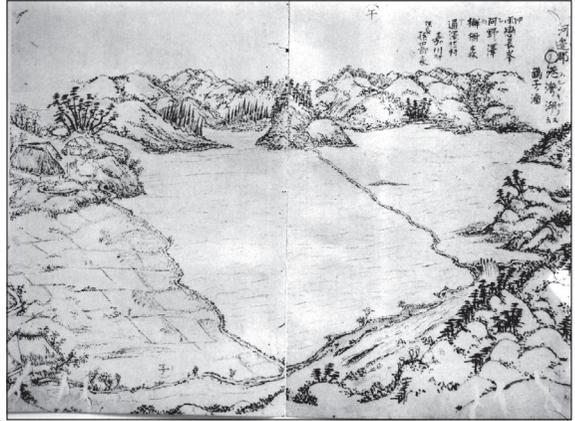
谷派) が新しく建ち、まわりは墓地となっていて当時の面影はない。梅津家の墓はもとにあった場所から少し離れた、旧寺跡の一部の小高い所に集墓、移されている。萬雄寺は明治二十五年(一八九二)に栖山の金照寺山の麓に移転し現在にいたっている。

梅津半右衛門憲忠は佐竹義宣に仕えた家老、弟の梅津政景も家老となり、二十二年間にも及ぶその日記は『梅津政景日記』(秋田県有形文化財)として貴重な文献である。

五、鶴子の瀧と孫四郎家

図絵右上の説明文は「河辺郡。港湾湖グルメキコ又言鶴子ノ瀧。雨恋長峰、阿野ノ沢、柏樹森、通沢ノ枝村嘉川村、保長孫四郎家」と記している。中心に大きいグルメキ湖、左側に茅葺屋根の保長孫四郎家、湖を囲む山々などを描いている。この絵をよく見ると野中の道を歩いている農夫らしい人、湖の回りの田圃で多くの人が、田植えであろうか農作業をしているのまで、細かく描いている。外の物干しに何かかけている孫四郎家は当時の肝煎であり、真澄は何か世話になっていたのであろうか。下北手柳館赤平にあるその大きな沼はいまは赤平沼と呼ばれている。真澄はグルメキ湖と書いているが、湖水が満々となった時、な

にか渦巻きができるというのでそう呼ばれていたらしい。雨恋長峰は、雨乞長峰で早魃の時に雨乞をすると必ず雨が降ったということである。孫四郎家は現在山本さんというお宅で、トタン葺きの新しい住宅となっている。家のすぐ近く、小さな丘の上にある一本の松は真澄が描いた図絵の中の松の大きさと似ているような気がする。私が訪ねた時、静かな湖の上を一羽の白鷺が優雅に舞飛んでいたが、当時は鶴なども多くいたのではないかと思われた。なお、このあたりのことは地誌には記録はない。



鶴子沼《勝地臨毫河辺郡》

『勝地臨毫河辺郡』にはこれまで見てきたほか、「鶴の湯」（下北守沢の冷泉で当時賑わっていたらしいが今はみえない）、「瑠璃光の杜」、「和田山」の図絵がある。

地誌河辺郡については、その一部しか載せられなかったが、次の一文をぜひ紹介したい。国道十三号を河辺町から出てすぐの山あいの集落船沢（旧河辺郡船岡村・現協和町）について、「舟か沢ねもち店」として、「此村に根花餅てふものうる宿、軒を並べて二戸あり、日坂のわらひもちのごとし。蕨餅を根花餅といひ、又、根餅といふ。蕨の異名を山根草といふ……」と記している。蕨の根からデンプンを探るのに使う道具に「ふね」というものがあったが、河辺町農林漁業資料館には丸木舟の形をした当時の「ふね」（幅五十センチ、長さ二尺、深さ五十センチ）が展示されている。

六、真澄と上北手

次に真澄が文政五年（一八二二）の三月に久保田から榎山、横森を経て、上北手大戸に行つた日記『筆の山口』を特に紹介したい。その一部を抜粋して鑑賞してみたい。

「……田面の道を伝うかた岨にさるとりといふ字在り。茨の名にやとおもへば、苔ねした

る碑に、元禄十年とゑりたれば、しかさる鳥といふにこそあらめ……」

横森三丁目から大戸への道を行くと左側に愛宕神社があり、そこに庚申塔が現存するが、三猿の絵はなんとか分かるものの二鶏や年号は風化してしまい、今は分からない。

「……大戸村にいたる。……田佃のいとまに、一ト村ラのもの、せりかこてふものを、地竹とて篠竹の如き小竹の雪に曲りたるをもて作る。世理籠の又の名を平籠ともいふ。せりかごは根芹つむ籠にはあらず、売櫃、千駄びつのだぐひにして、市にも売る商籠、市籠にぞありける。是を作る業すれば、大戸籠ともはらいへり。林のなかにいつさかばかりなる桜咲たり。此花は雪の下とて、いちばやき桜なり。こと国にいはず、彼岸桜のさまして、又芳野桜に似てことなり、甲斐国の月見里、鶴郡に多かる柴桜のたぐひ也。此花はこの川ノ辺ノ郡の駅路、豊嶋の郷の東南にて、平尾鳥山といふあり。その村なる柴生山、また善知鳥の観音山の麓あたりに、此雪の下多し。秋田郡の手形の蛇野広面の赤沼、川ノ辺ノ郡の桜などの村々の花商売等が、冬なれば梅は村々里々に買ひ小枝を折り集め、桜は十月の始めより、かの平尾鳥山に、鼻こくりなどい

ふいとけはしき山坂を、はるはるとからうじてよぢのほりて折り得る桜を、水にさし養ひ花室ハナムにこめて、霜月の仏事を始めに、梅の初花初桜をぞうるめる。年越え正月ムツギキとなりては、猶、梅桜を市にひさぎ、真マコトの花の咲まで、是を売りつぎぬ。心ありける花あき人也……」

と大戸籠や、雪の下といふ桜、梅や桜の花室のことなどを述べている。

「三月五日、けふは苗代のたね水にひちほしたるを、人さばに集りて、大桶に湯をみたらして、湯漉しなんどといふ事もして、床に寝さすてふことをするに、湯種ユダネ蒔てふ歌の意コトぞ知られたる。家の後ヤシロの山に紅の薄花桜いと高き木に咲たり。此花種コノタネ蒔くときは、たね桜といひ、又、秋田の色づくころは、いつも紅葉すれば、そを見て稲刈りイヌ初るに、いとよきためしなんど人のいふを聞いて、

紅葉するころはいね刈る苗代のたねまきさくら今咲にけり

三月六日、久保田へ行人あれば、此桜を折りて千穂屋長秋のもとへ贈る……」

と、前年の冬に鳥屋長秋のひとりっ子がもがさ（疱瘡）で亡くなった時に詠んだ歌は桜の小枝に添えたが、この日詠んだ「なきたまの

手向と花の一枝を折るもなみだのたねまきさくら」は長秋が袖を濡らすだろうと、手元に止めたという。

三月八日は百崎の百鈴寺（修験寺）を訪ねているが、

「……此寺の後なる山に、早藕ワカカいと多く、紫菀スズメ、蔓菀ツルミ、桜すみれ、春雪シヤウクハカマ紅なんど咲まぜて、おもしろき山坂也。女童メウコ二人手ごとに、片籠カタコの花折りよぢて、岨ソバ登り来て「かたこばな雨のふる日はしほめども咲て見せろちやかたこ花」ともろごゑにうたふは、このわたりウラの郷ウラの磨フリ白スカタ唄也……」

とほほえましい情景を記している。真澄は大戸に滞在して松洲の翁と語り、弥生三月の上北手の田園風景を楽しみ、歌を詠み、それを日記に残している。この『筆の山口』には三枚の図絵を残している。「桜山の猿鶏の岡」「大戸から見た鳥海山」「百崎の木蓼山」である。

その年の四月なかば、大戸の松洲の翁と別れて、久保田に帰る道筋の事が『槻の若葉』として書いており、明田の駒形の社、スズキの観音、釜木薬師や、春雨の中の田植え、さなぶりの事、水辺や春の野に咲く花々などを細かく観察した名文といえる。真澄が大戸からの帰途に通った田園地帯はすっかり市街地と変化し、昔日の面影はない。

七、『勝手の雄弓』の岩見三内

文化八年（一八一二）八月、真澄は那珂通博（藩校明德館助教）らとともに秋田市太平から岩見三内（河辺郡河辺町）を訪ねている。この時の日記が『勝手の雄弓』であるが、その日記本文は太平の林清寺（曹洞宗）のところでまで終わっている。しかし幸いなことに、その先の勝手明神から岩見三内方面の図絵が残っている。岩見三内のものは十六枚であるが、その説明文とともに当時を知る上で貴重なものである。

杉沢の「雁サワラ木と白葡萄」の絵に描かれた石塚家の榎（サワラ）の木は今も健在、絡みついている山葡萄は樹勢がだいぶ弱っているものの現存している。その幹の太さは県内一といわれるのもうなずける。今後もぜひ大切に保存してほしいものである。

真澄は「太平、岩見地区には大きい家が多いが、その中でもわきて大きい」と書いた鶴養の「太郎八の屋戸ヤド」は、その後改装はされてはいるが、当時の面影を良く残している。藩政時代は苗字帯刀を許された肝煎であったという。

「盛形」（モツカタ）の図に描かれた柄のついた木の容器は、同型のものがたまたま地元

で見つかり、その実物が河辺町農林漁業資料館に展示されている。一種の計量容器と見られる珍しいものである。その他の図絵としては山の姿などを描いた「岩谷山の窟」「筑紫村」「阿波蹠山」「岩谷山の女人堂」がある。また「ほのす」(伏伸)「この淵」「殿淵の獨木橋」「三奈差久の瀧」(舟作)「岩見の相會」(岨谷峡)「三内川」などがある。これらは殆ど昔の姿そのままに、今も滝や清流の景勝地として残っている。

他に全景を俯瞰した「台村」「岩見荘」「鶴養村」の図がある。「鶴養村」は中山峠から見た鶴養盆地を桃源郷のように描いているが、今訪れてもこの絵と全く同じような感じをうける。



杉夫の盛形《勝手の雄弓》

三内からの帰途に描いたと思われる「八山」「柳館村」「明田の富士山」(以上秋田市)がある。

以上、当時の河辺郡に関する真澄の記録を見てきた。今回は、その一部しか紹介できなかったが、いくらかでも参考になれば幸いである。

この稿は平成十六年七月、菅江真澄研究会総会で研究発表したものに加筆まとめたものである。

(当研究会幹事・秋田市)

参考文献

- 『ガイド菅江真澄の道』 田口昌樹著 秋田県青年会館
- 『下北手の桜・近郷史』 桜郷史会編・発行
- 『菅江真澄全集』四・五・八・十一巻 内田武志編 未来社

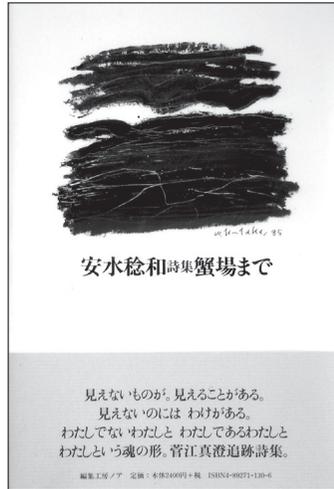
新入会員の報告 (平成 16 年 11 月 30 日現在・敬称略)

石川 繁	秋田市	山口 宣義	秋田市
宮崎 侑子	秋田市	高橋 鎮雄	秋田市
相場久美子	秋田市	斎藤亜希子	秋田市
富田 弘平	東京都	小林 秀利	山形県
佐藤ケイ子	秋田市	大畷 久雄	秋田市
佐藤 民枝	本荘市	細川 純子	仙台市

● 図書紹介

『安水稔和詩集蟹場にて』

安水稔和 著



安水稔和詩集蟹場まで

見えないものが、見えることがある。
見えないのには、わけがある。
わがしでないわがしと、わがしであるわがしと
わがしという魂の形。菅江真澄追跡詩集。

編集工房ノア 定価：本体2400円＋税 ISBN4-86271-138-6

神戸在住の会員安水稔和氏（詩人・神戸松蔭女子学院大学教授）は、このたび『安水稔和詩集蟹場にて』を刊行した。二〇〇一年から二〇〇四年まで詩誌『歷程』などに掲載したものをまとめたもの。「秋田」「津軽半島」（外浜奇勝）「夏泊半島」（津軽の奥）「気仙沼」（はしわの若葉統）「唐桑半島」（はしわの若葉統）「広田崎」（はしわの若葉統）と六編となっている。いずれも全国菅江真澄研究会に参加したその前後に『菅江真澄全集』（未来社版）を手に現地に立つての創作である。

その中から「十三湖まで」を紹介しよう。

十三湖まで

刀佐の水海の見まほしく、いで、そこ
にいかまほしと 菅江真澄『外浜奇勝』

野の道に分け入る。
生い茂る林を抜ける。

日の傾くころ
村長の家に宿を求めた。

翌朝。

塩つけのすずぎと
田のはたで採ったぬなを食べ。
露踏み分けて出立。

※ぬな＝蓴菜。じゅんさい。

*

男ばかりの村を過ぎる。
娘子供ばかりの村に入る。
うしろから馬で来た男が
しわがれた声で歌ってかけぬけた。

十三の砂山

米ならよかる。

十あまり三の

川流れ入る刀佐の水海。

*

稲の葉のあいだを行く。
はるばると続く林を行く。
視野のはずれに鈍く光る
水らしいもの。

潟に出て潟伝い。
しばらく行つて振り返ると。
水の上に岩木山が
遠くしただみのように見えた。

※しただみ＝細螺。気さこ、ぜげがい。ニシキウ

ズカイ科の巻貝。

本稿は真澄の寛政八年（一七九六）六月の日記『外浜奇勝』を参考としたものであることが理解できる。

※発行所 畿編集工房ノア

大阪市北区中津三一七一

☎〇六一六三三三―三六四一

価格 二、四〇〇円＋税

一般の書店からも購入できます。

（紹介者 田口昌樹）

●図書紹介

『かなせのさと』第一集

菅江真澄資料センター編



「企画展解説」 二十三項目

「書名の周辺」 九項目

「真澄歳時記」 八項目

「真澄のいる風景」 七項目

「秋元松代『菅江真澄』常人の発見」 五項目

「講演要約」 三項目

「随想」 九項目

以上六十四項目になるが、それぞれの項目が真澄研究の着眼点を紹介しているようにも思える。

秋田県立博物館菅江真澄資料センターでは「かなせのさと」を発行し、現在六〇号まで発行され、好評をえています。このたびこれの一号（平成八年八月）から三十号（平成十三年十一月）までが合本になりました。

内容は「企画展解説」「書名の周辺」「真澄歳時記」「真澄のいる風景」「秋元松代『菅江真澄・常人の発見』を読む」「講演要約」「随想」などに分類される。

このような観点から「目次」も頁数から順番に羅列することなく、記事の内容によって分類されている。

また、真澄の業績についていろいろな角度からの記事が見られ、真澄を学ぶ者にとって貴重な示唆を与えてくれるものと思われる。朝夕一項目ずつ読むことで真澄研究の面白さが体験できる資料ともいえる。今のところ執筆者は博物館の職員に限られているようであるが、真澄学習室の利用者、講演会聴講者などに門戸を広げたいかと提案したい。

この冊子の編集は菅江真澄資料センター、販売は秋田県立博物館内の「秋田県立博物館ミュージアムショップ」。価格は八百円（税込み）。

※秋田県立博物館ミュージアムセンター

☎〇一〇一〇一〇二二四

秋田市金足鳩崎字後山五二

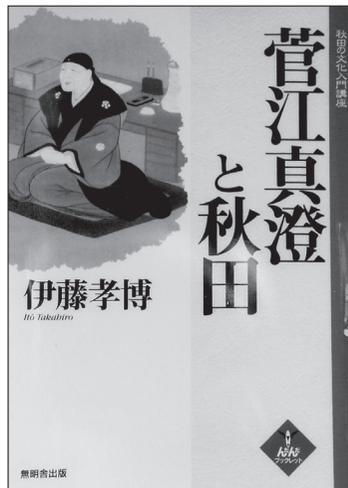
☎〇一八七八七二一一七七〇

（紹介者 田口昌樹）

●図書紹介

『菅江真澄と秋田』

伊藤孝博著



秋田市の出版社・鑛無明舎出版では、新しいシリーズとして、「んだんだブックレット」の五冊を発売した。その中の一冊が表題の『菅江真澄と秋田』である。「真澄の本を読みたいが、その人物像が良くわからない」という人の入門書として出版されたようである。目次を見てみよう。

- 1、菅江真澄の旅の跡
- ① 中部地方から越後〜東北地方への旅
- ② 秋田・岩手・宮城の旅
- ③ 北海道と津軽・下北の旅
- ④ 真澄の旅の目的

⑤ 秋田での旅

⑥ 菅江真澄らしきとは

- 2、菅江真澄への再評価
- 3、秋田にとつての菅江真澄
- 4、菅江真澄が伝えた秋田
- 5、「真澄ワールド」への道標となつている。

「誰でも読める本」という趣旨から、文章もきわめて平易であり、国学・本草学・地誌などの熟語もわかりやすく解説をしており、中学生でも十分理解できそうである。

内容も「生涯を旅に生きた理由」「秋田六郡の地誌編纂」などについてもその経緯が分かりやすく解説されている。

この著書を読んだ読者が次に読むべき本として『菅江真澄遊覧記』五卷（平凡社）、『菅江真澄読本』五卷（無明社出版）を紹介している。著者は米沢市出身の元通信社記者。

※発行所 秋田市広面字川崎一 一一二一

無明舎出版

☎〇一八—八三二—五六八〇

価格 九百円＋税

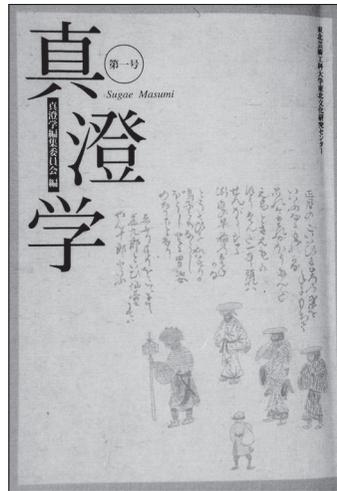
一般書店でも購入できます。

（紹介者 田口昌樹）

● 図書紹介

『真澄学』

真澄学編集委員会編



東北芸術工科大学東北文化研究センター真澄学編集委員会（山形市）では標記図書を刊行した。論考、研究の標題と執筆者を次に紹介する。

「はじめりの真澄学のために」

赤坂憲雄

〔論考〕

「菅江真澄と考古学」

富樫泰時

「菅江真澄と民俗学」——境界神への視点

神野善治

「菅江真澄の神道観」

齊藤壽胤

「菅江真澄と秋田」

金森正也

「菅江真澄と八郎潟」

天野壮平

「菅江真澄『ひなの遊び』

と秋田の民俗芸能」

門屋光昭

〔講演録〕

「紀行文学における菅江真澄の位置」

ヘルベルト・E・プルチョウ

〔注釈〕『奥の手風俗』菅江真澄

〔現代語訳〕

細川純子

〔注釈〕

今石みぎわ

〔研究ノート〕

「孤独なドキュメンタリスト」

飯塚俊男

「菅江真澄のみた赤倉山」

鬼神と真澄岩木山信仰の神秘

岩渕和紀子

「菅江真澄の旅を読む一視点」

—— 旅路中の出会いを中心として ——

竹中玲磨

「真澄に「削りかけ」研究の今後をさぐる」

今石みぎわ

〔連載〕

「菅江真澄のいる風景」——市に佇む風景——

細川純子

「菅江真澄の文化的位置づけを考える①」

真澄学の可能性

—— フィロロジストとしての視座 ——

磯沼重治

「菅江真澄から近世史をさぐる①」

鮎漁に生きる人々

——渡島半島西海岸の旅—— 菊池勇夫
 執筆者の中、赤坂憲雄、富樫泰時、天野荘平、
 齊藤壽胤、H・E・プルチョウ、磯沼重治の
 各氏は当研究会会員である。

※発行所 東北工科大学

東北文化研究センター

山形市上桜田二〇〇

☎〇二三一六二七―二一六八

価格 二、一〇〇円（税込）

一般書店でも購入可能です。

（紹介者 田口昌樹）

寄付金のお礼

千円 船木真之さん（男鹿市）

三千元 田口昌樹さん（秋田市）

ありがとうございました。

平成十六年十二月二十日現在

真澄往来

◇『真澄遊覧記・信州の部』の刊行を巡って

胡桃沢友男氏

当研究会会員故胡桃沢氏は平成十二年に亡く
 なられた。今回、ご子息胡桃沢勘司氏が故胡
 桃沢友男氏の名で『柳田国男と信州』を刊行
 され、その中に本稿が取り上げられている。

◇「菅江真澄の道」を歩く

秋田河川国道事務所

国土交通省秋田河川国道事務所では「菅江真
 澄の足跡を活かした地域活性化に関する検討
 会」を立上げ、道の駅と男鹿観光を結び付け
 た運動を展開中である。今回仙台市で発行
 されている雑誌『KAPPO』（仙台闊歩）
 十一月号に標記記事が掲載された。副題は「な
 まはげの里・男鹿半島に残るもうひとつの奥
 の細道」、寒風山や大栈橋などの景勝地を描
 いた真澄の図絵（県立博物館所蔵写本）と現
 況のカラー写真を掲載している。

◇「菅江真澄に学び、旅に活かす」

田口昌樹氏

秋田河川国道事務所が推進している「菅江真
 澄の足跡を活かした地域活性化」の運動に関
 連して、標記記事を『河北新報』に寄稿し、
 真澄の著作が活字になるまでの経緯を紹介
 し、真澄の著作を活用した観光を提案してい
 る。

◇村上家を訪れた菅江真澄

佐藤英男氏

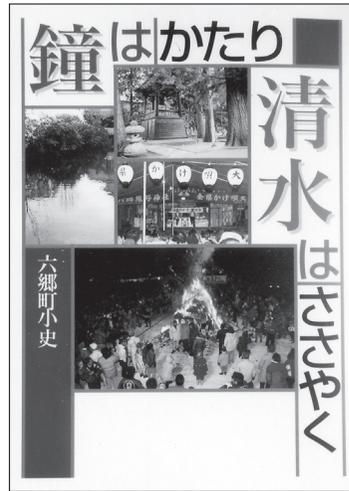
岩手県胆沢町教育委員長佐藤英男氏（当研
 究会会員）は標記記事を『胆沢・両磐の歴史』（巖
 郷土出版社）に寄稿した。天明六年（一七八六）
 正月の日記《かすむ駒形》の中から胆沢町の
 村上良知家に滞在した記録と、前沢町の鈴木
 常雄家に滞在した記録が紹介されている。

◇『鐘はかたり清水はささやく』

六郷町史編纂委員会

平成十六年十一月一日、六郷町は千畑町、仙
 南村と合併し「美郷町」として発足した。こ
 れを機会に標記図書を発行し六郷町全戸に配
 布した。この中には「菅江真澄と郷土史家」
 として、真澄の六郷滞在についてふれ、真澄
 の六郷滞在を支援した小西匡之、斎藤則庸、
 熊谷直堅、本覚寺良広にふれている。また、

真澄研究に力のあつた後藤宙外、小西宗吉(会
員小西レイ子氏の父)、栗林治郎作、栗林新
一郎(いづれも故人)が取り上げられている。



◇「大先輩の学恩」

——皇学館の学の確かさ——

新野直吉氏

秋田県立博物館名誉館長新野直吉氏(秋田大
学元学長)は皇学館館友会発行の雑誌『館友』
二四六号に標記記事を寄稿した。当研究会会
員鈴木太吉氏が著した『真澄墓碑に刻んであ
る長歌』を「全国菅江真澄研究会」で当研
究会会員塩瀬忠夫氏(愛知県)から贈られ、
鈴木太吉氏の業績を紹介し、九十一歳になっ
ても緩みのないその学論に対し、畏敬を表し
たものとなっている。

◇「菅江真澄に学ぶ」

有限無明舎出版

同社が秋田県道路広報連絡会議監修の下に発
行している「ラ・ルート」三十一号では「第
十七回全国菅江真澄研究会」——藤里町で開
催——を取材し、研究会の内容を紹介した。
そして藤里町菅江真澄会会長福司満氏に面接
し、開催までの苦勞、今後の真澄研究などに
ついて紹介している。

◇『天明の密偵』——小説菅江真澄——

中津文彦氏

江戸川乱歩賞受賞作家中津文彦氏はかねて
『岩手日報』に同名の小説を掲載していたが、
今回加筆、修正の上、雑誌文藝春秋から単行本
として出版した。「主な参考文献」として当
研究会会誌『菅江真澄研究』をあげている。

※価 格 一、七二四円十税

一般の書店から購入出来ません。



あらほの真澄

——友好団体の活動の報告など——

◇気仙沼大島に「菅江真澄の道」標柱建立

上坂親子氏

天明六年(一七八六)七月、真澄は宮城県気
仙沼市の大島神社に参拝するため、大島大向
の小野寺某の家に二泊しているが、その子孫
にあたる上坂親子さん(気仙沼市長崎)は、
当時の大向の小野寺家の屋敷跡にその事を記
した標柱を建立した。小野寺氏の子孫でつく
る「小野寺一族の会」(岩手県南部、宮城県
北部の小野寺姓の人たちで結成)はさっそく
現地を訪問、標柱を見学し二百年前の先祖と
真澄を偲んだ。(『三陸新報』の記事より)

◇「真澄に学ぶ教室講演会」を実施

秋田県立博物館

秋田県立博物館では九月十七日(土)、標記
講演会が開催された。講師及び演題は、
「菅江真澄の歴史認識」

小池淳一氏(国立歴史民俗博物館助教授)

「八郎潟の木造船」——真澄と打瀬船復元から

潟船を考える——

天野莊平氏（男鹿市菅江真澄研究会副会長・当研究会常任理事）
約百五十名の人が聴講した。

◇「真澄に学び、真澄を活かす」

NPO 法人秋田岩手横軸連携交流会
岩手県雫石町に本部のある秋田岩手横軸連携交流会（理事長・清水浩志郎秋田大学資源工学部教授）では、岩手県宮古市と秋田県男鹿市を結ぶラインの活性化をはかる運動をしているが、菅江真澄の記録を学び、それを活動の中に取り入れようと、十月二十一日、秋田県生涯教育センター分館ジョイナスで講演会を実施した。講師は田口昌樹氏（当研究会副会長）、演題は「菅江真澄に学び、菅江真澄を活かす」、岩手、秋田の両県から七十名ほどが参加した。

◇「菅江真澄と稲作」

秋田県産米改良協会
秋田県の稲作の改良、種苗などの管理、供給を業務としている秋田県産米改良協会（秋田県農協会館内）では、毎年種苗交換会の前日、農業に関する勉強会を実施しているが、今年十月二十八日、神岡町で「菅江真澄と稲作」

というテーマで真澄が記録した稲作の十二月に關する講演を聞いた。講師は田口昌樹氏。

◇第三回全国街道交流会議開催される

山形県上市市
第三回全国街道交流会議が十月十四日～十六日の三日間、山形県上市市で開催された。二日目の基調鼎談「山の向こうのもう一つの日本」には赤坂憲雄氏（東北芸術工科大学教授・当研究会会員）が登壇した。第四分科会「いわ・みちのく街道と旅人」には田口昌樹氏が登壇し、東北・北海道を中心に四十七年間にわたり旅に生きた菅江真澄の生涯について語った。

◇「菅江真澄の足跡を活かした地域活性化に関する検討会」を開催

国土交通省秋田河川国道事務所
第一回 八月六日「真澄の足跡に関する現状と課題」「男鹿半島と道の駅「てんのう」でのモデル実施」についてなどについて協議し、田口昌樹氏（検討会メンバーに委嘱された）が「菅江真澄に学ぶ」——真澄ほど秋田を記録した人はいない——として講演した。会議では松尾芭蕉と菅江真澄の知名度の違いについて質疑が多かった。この会議の結果、道の

駅「てんのう」で真澄と男鹿半島と真澄の展示と観光案内をすることになった。

第二回 十一月十二日「第一回検討会の議事録確認」「第一回検討会によるモデル事例の取り組みについて」「菅江真澄の足跡を活かした秋田の観光振興について」を協議した。

◇「菅江真澄の道」を案内

男鹿市菅江真澄研究会



案内人と案内板の一部

男鹿市菅江真澄研究会（小山善愛会長）では国土交通省秋田河川国道事務所の依頼によ

り、十月九日から十一月三日までの土曜、日曜、休日の七日間、男鹿半島の入口、道の駅「てんのう」で男鹿半島観光と菅江真澄の道（標柱・案内板・碑など）のボランティアガイドを行い好評だった。当初は十月九日から十一日までの三日間の予定であったが、多くの人が関心をもって来店したため、十一月三日まで延長された。期間中、二回にわたり、NHKテレビ・ラジオでその模様が放送された。

◇「秋田県南地区講演会」開催

菅江真澄研究会

当研究会主催の「県南地区講演会」は十一月三日（火）午後一時三十分より、山内村公民館講堂で開催された。

「地誌『平鹿郡』の見方・考え方」として松山修氏（秋田県立博物館学芸主事・当研究会会員）、「菅江真澄翁の見た山内」として佐々木修一郎氏（山内村文化財保護協会会長）が講演した。秋田市内の会員のほか、岩手一関市のさいかちの会、男鹿、仙北、大森、湯沢、藤里の各真澄研究会の会員も多数参加し、地元の人も含め、約百名の人が聴講した。来年の九月二十四（土）、二十五日（日）の「第十八回全国菅江真澄研究集会」開催にむけてさらに一歩前進した。

◇「中央地区菅江真澄の足跡を探访する会」を実施

菅江真澄研究会



参加者全員の記念撮影（岩見ダム）

標記探访する会は予定通り十月三十一日（日）に実施した。参加者四十人（内会員十七名、会員外二十三人）がマイクロバス二台に分乗し、秋田市太平から河辺町岩見三内の溪谷を訪ねた。会員大場与志美、佐藤宗久、清水英明、高橋一夫の各氏がバスガイド、真澄が図絵に描いた「山子の盛形」「岩谷山・筑紫森」「白葡萄の木」「中山峠」「太郎八の家」「殿淵・伏伸」などを案内した。その後、会場を秋田

市上新城の大滝山温泉に移し昼食の後、田口昌樹氏が「日記《勝手の雄弓》の周辺」と題して「奈良県吉野町から取り寄せた資料」を紹介しながら講話を行った。なお、田口昌樹氏はこの探訪会にあわせて、秋田魁新報夕刊に「日記《勝手の雄弓》の周辺」として紹介記事を掲載した。

◇「郷土の歴史と菅江真澄翁」

菅原源八翁顕彰会

江戸時代後期に活躍した秋田県昭和町の先覚菅原源八翁を顕彰する会では本年度の総会の後、「郷土の歴史と菅江真澄翁」として講話会を開催した。真澄の《軒の山吹》《新古祝褰品類之図》について学び、明治時代の人・石川理紀之助の菅江真澄研究についての話を聞いた。講師は田口昌樹氏。

◇「胆沢・磐井を歩いた真澄」

さいかちの会

一関市のさいかちの会（赤塚喜美子会長）では十一月の学習会として、佐藤英男氏（岩手県胆沢町教育委員会委員長・当研究会会員）を講師に「胆沢・磐井を歩いた真澄」として講演会を開催した。

◇「菅江真澄と歴史を旅する」

江崎友子氏



展示「菅江真澄と歴史を旅する」

神奈川県座間市主催のあすなろ大学で学習中の江崎さんは「菅江真澄の存在」を知り、今回表題のレポートにまとめ、同大学で独自の展示会を開催した。レポート内容は、「はじめに」「今から二百五十年前のこと」「真澄三十歳の旅立ち」「菅江真澄遊覧記」「信濃の旅」「真澄とアイヌ」「真澄の恐山・私の恐山」「四十七年間も旅が続けられた謎」「真澄をめぐる人々」「部屋から一步もでられない人と一万六千キロ歩いた人」「菅江真澄研究会とは」などとなっている。

原稿募集のお知らせ

前号のご案内の通り、『菅江真澄研究』第五十五号は「論文特集号」として、五月二十日頃に発行予定です。会員各位の論文・研究・随想などを特集予定です。左記により原稿募集しますので、ぜひご応募お願いします。

記

内容 論文・研究発表・随想などジャンルは問いませんが当研究会の「投稿規定」によります。

形態 B5判の冊子四十五頁程度

枚数 四百字原稿用紙八枚以内（写真・グラフなどを含む）

期限 平成十七年二月二十八日（厳守）

掲載の有無

編集委員会の協議により決定します。

謝礼 掲載誌を三部贈呈します。

※論文募集に関する問い合わせ、原稿の送

付先は、

〒〇一〇一―一六二三 秋田市新屋町字関

町後一九〇―二六 田口昌樹

TEL・FAX

〇一八―八二八―六九一六

刊 後 録

◇猛暑・台風・地震と今年は自然災害の多い年でした。さらに今年には例年のない暖冬でないかと心配されている。

◇真澄の四十七年間の旅の中で、多くの自然災害が記録されている。「浅間山の噴火」（伊那の中路）、「天明の飢饉」（外ガ浜風）、海難事故（えみしのさえき）、男鹿大地震（男鹿の寒風）などである。花巻では寄寓していた伊藤鶏路の家で火災に合っている。来年は災害の無い年であつて欲しいと思う。

◇八月以降、毎月第一火曜日に秋田市で「真澄学習会」を開催しているが、会員のほか一般の人を含めて毎回三十名前後の参加をえて感謝している。一般参加者の方々に研究会への入会を勧めており、十五名の方々から新たに会員になっていただいた。

◇次号は「論文特集」ということで、多くの会員からの応募に期待したい。

◇第五十四号お届けします。

◇良い年をお迎え下さるよう祈念しております。

（編集委員 天野荘平・菊地利雄・佐藤春雄・田口昌樹）